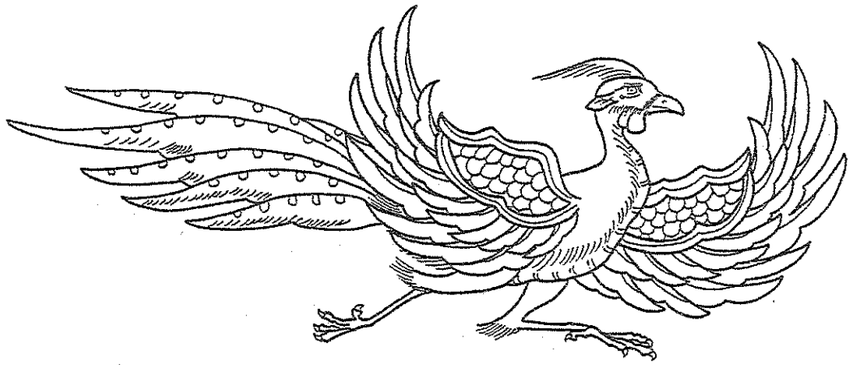
明日香村発掘調査報告会

－平成１２年度の調査成果から－



平成13年11月18日（日）

明日香村教育委員会

次　　第

受　　付	１：３０
開　　会	２：００
開催挨拶	２：００
調査報告	２：０５～３：２０
報告１	２：０５～２：３０
報告２	２：３０～２：５５
報告３	２：５５～３：２０
休　　憩	３：２０～３：３０
記念講演	３：３０～４：３０
閉会挨拶	４：３０
閉　　会	４：４０

調 査 報 告

報告１　「酒船石遺跡（第１５次）の調査」　清岡廣子

報告２　「酒船石遺跡（第１４次）の調査」　相原嘉之

報告３　「キトラ古墳の探査」　納谷守幸

酒船石遺跡第15次調査概要　～丘陵西側の調査成果～

はじめに

酒船石遺跡第 15 次調査は農地造成に伴い、明日香村大字岡 398、399 でおこなった調査である。酒船石遺跡は史跡酒船石のある丘陵一帯にひろがる遺跡であり、これまでの 14 次にわたる調査で丘陵の標高 129～130m付近で砂岩切石積みの石垣が巡ること（第１・２次）、丘陵西側では石垣が４重に巡ること（第３・７次）が明らかにされている。丘陵北裾では石造物を組合わせた導水構造を持つ祭祀空間が発見されるに至り（第 12～14 次）、遺跡全体の性格解明に向けての新たな視点を提供している。

今回の調査地は丘陵西裾にある水田であり、第３・７次調査地に西接している場所にあたり、丘陵の石垣遺構に関連する遺構の存在が期待される。調査地の南側については平成８年度に第９次、平成９年度に第 10 次としてすでに調査をしており、石組溝、石敷、建物などを検出している。調査地では第９・10 次で検出した遺構の延伸部分の検出が確実視された。

また、調査地は飛鳥京跡の北東辺に位置している。飛鳥京跡は昭和 34 年以降の調査成果により２、３時期の遺構の重複がみられ、上層遺構は飛鳥浄御原宮であることが確実視されている。この上層遺構の東限塀にすぐ近接しているものと想定される。

従って、この調査地は酒船石遺跡と飛鳥京跡の境界に位置する場所であり、双方の遺跡に関連する遺構の存在が期待される。調査面積は 650 ㎡である。

検出遺構

15 次だけではなく、９・10 次調査も含めた主要遺構の概要する。石組溝２条、石組小溝５条、石敷、建物などを検出している。

石組溝①（ＳＤ０１）　西側で検出した幅 0.5cm の溝で、深さ 80cm。やや東に振れている。東側石は３、４石積まれる。西側石は１石のみ遺存している。底にも石を敷いている。

石組溝②（ＳＤ０２）　西側で検出した幅２ｍの溝。深さ１ｍ。北側では 2.5m と幅が広くなる。両側石ともに４石ずつ程度積まれている。底にも石を敷いている。西側石は整然と積まれるが、東側石はそうでもないため、改修の可能性が示唆される。

石組小溝①（ＳＤ０３）　幅 30cm の東西方向の溝。深さ 10cm。側石、底石ともに川原石である。本来は石組溝②へと流れると想定される。石敷①と接続する。

石組小溝②（ＳＤ０４）　幅 30cm の南北方向の溝。深さ 10cm。側石、底石ともに川原石である。小溝①とＴ字に接続する。

石組小溝③（ＳＤ１２）　幅 30cm の南北方向の溝。側石、底石ともに川原石である。クランクして、さらに北に流れる。

石組小溝④　幅 20cm の南北方向の溝。側石は川原石、底石は砂岩である。残りは良いとは言えず、底石すら抜かれている。本来は石組溝②へと流れると想定される。石敷①と接続する。

石組小溝⑤　幅 20cm のＬ字状の溝。側石は川原石、底石は砂岩である。北端でさらに西に振れる。これは丘陵の張りだしに沿ったための施行であろう。北半部分は側石の残りが良いが、底石には土圧等による歪みがみられ水平を為してはいないが、南から北に流れると考えられる。南側では底石すら遺存していない箇所がある。

石敷①（ＳＸ０４）　南側で検出した石敷である。良好に遺存する。

石敷②（ＳＸ０５）　石組溝①、②の間にある石敷。

石敷③（ＳＸ１１）　小溝③の東側にある石敷で、最も古いと考えられる。

石敷④　小溝④の南側にひろがる石敷である。

石敷⑤　小溝⑤の西側にある石敷で、溝②と接続すると想定される。

石敷⑥　北側で検出した石敷で、小溝⑤に接続する。

建物（ＳＢ１２）　石敷①の北側で、東西４間、南北３間確認されている。庇が取り付く。小溝③の形状と柱間 10 尺から規模は大きく、南北棟であると想定している。

水溜め状遺構（ＳＸ１６）　石敷の北側で検出した遺構で、南北 1.2m、東西 2.5mの範囲に砂岩が敷かれる。建物廃絶後につくられたと考えられる。

石積み　部分的な石積み、石列状の遺構は調査地内で散見される。石組溝①と②の周囲に石積みがみられる。ここで特に石積みとしたのは石敷⑥の東側の一群で基本的には丘陵の石垣に使われた石が崩壊後、石積み状を為したものと考える。石の大きさは長径 50cm 以上のものが多い。中には本来石垣の基礎石と思われる１ｍ を超す径をもつ石など面取り加工のみられる石もある。

出土遺物

遺物量はさほど多くない。土師器、須恵器、瓦器などがみられる。遺物の多くは石組溝埋土からの出土であり、15 次調査分は現在整理中であるが、９・10 次調査との整合により、７世紀後半から８世紀前半のもので占められる。

まとめ

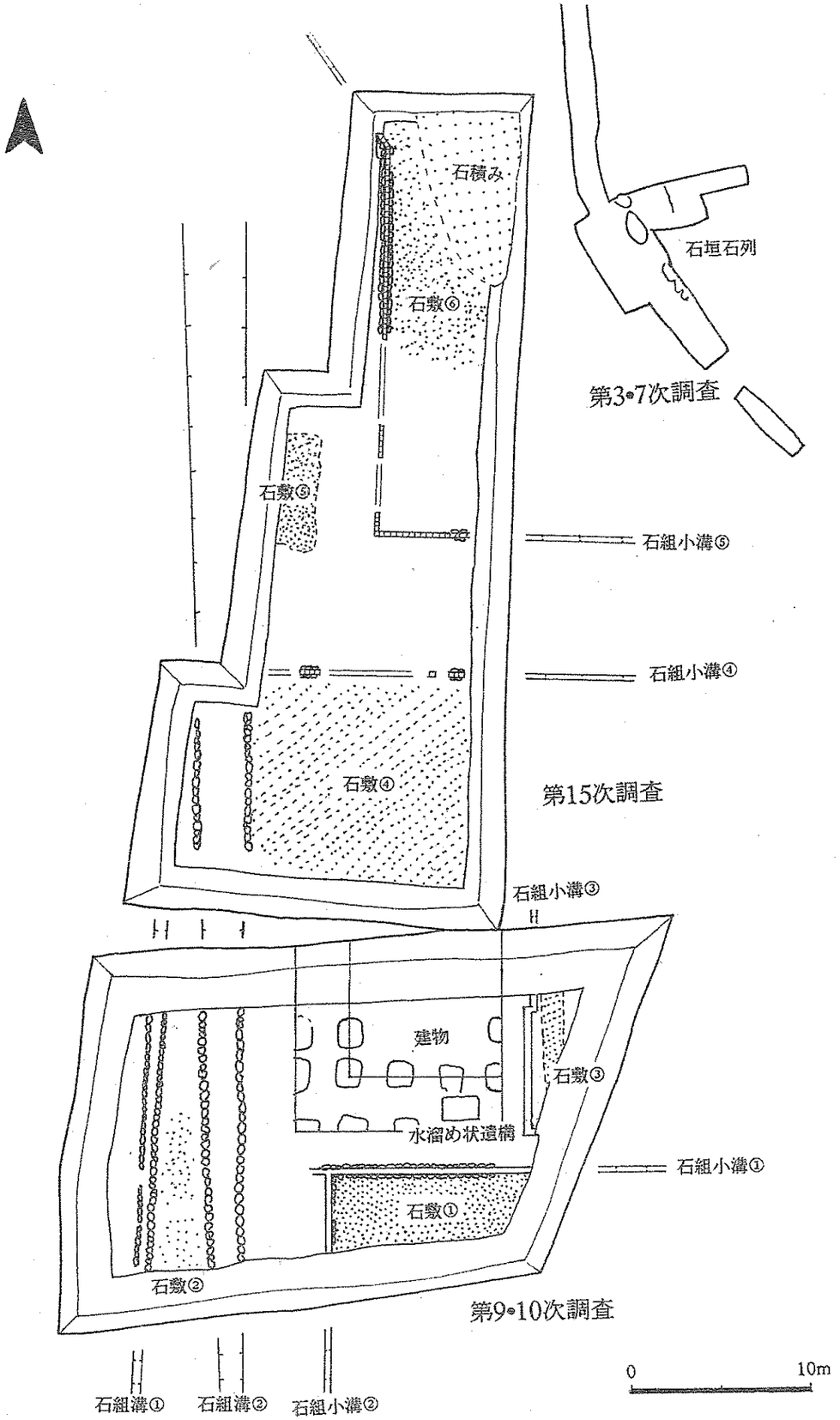
この調査で酒船石遺跡の丘陵西裾の水田における調査は終えることとなった。主な成果には以下の点が挙げられる。

第１に、酒船石遺跡の石垣遺構との関連については、本来の丘陵裾に石列などがあるとも想定したが、明確にはできなかった。３・７次における石垣の崩壊状況などを鑑みると、落石したとみられる一群の石を検出したものと考えられる。石組小溝⑤の斜行状況と石敷⑥の関係をみると丘陵裾まで石敷がひろがっていたものと想定している。

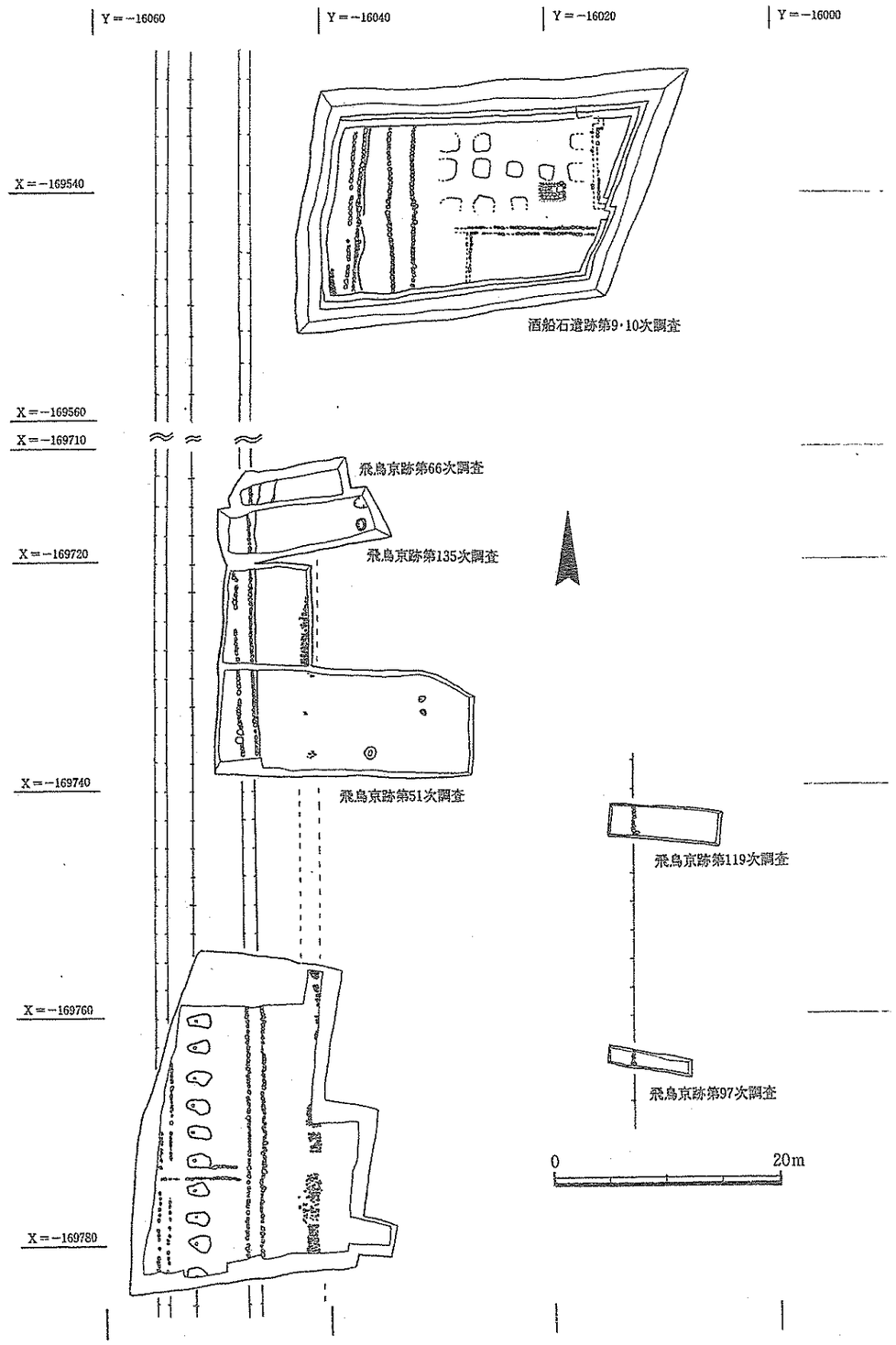
第２に、大型建物の規模確定を目指したが、遺構保全の関係もあり、検出には至らなかった。石組小溝④まででおさまると想定している。

第３に、石組溝②は若干幅が流動的である。調査では南北長 30m を検出している。さらに南側、北側に伸びる。飛鳥地域の基幹排水路であると想定される。調査地の 100m 北側で調査された飛鳥寺南方遺跡で検出された石組溝に接続すると思われる。

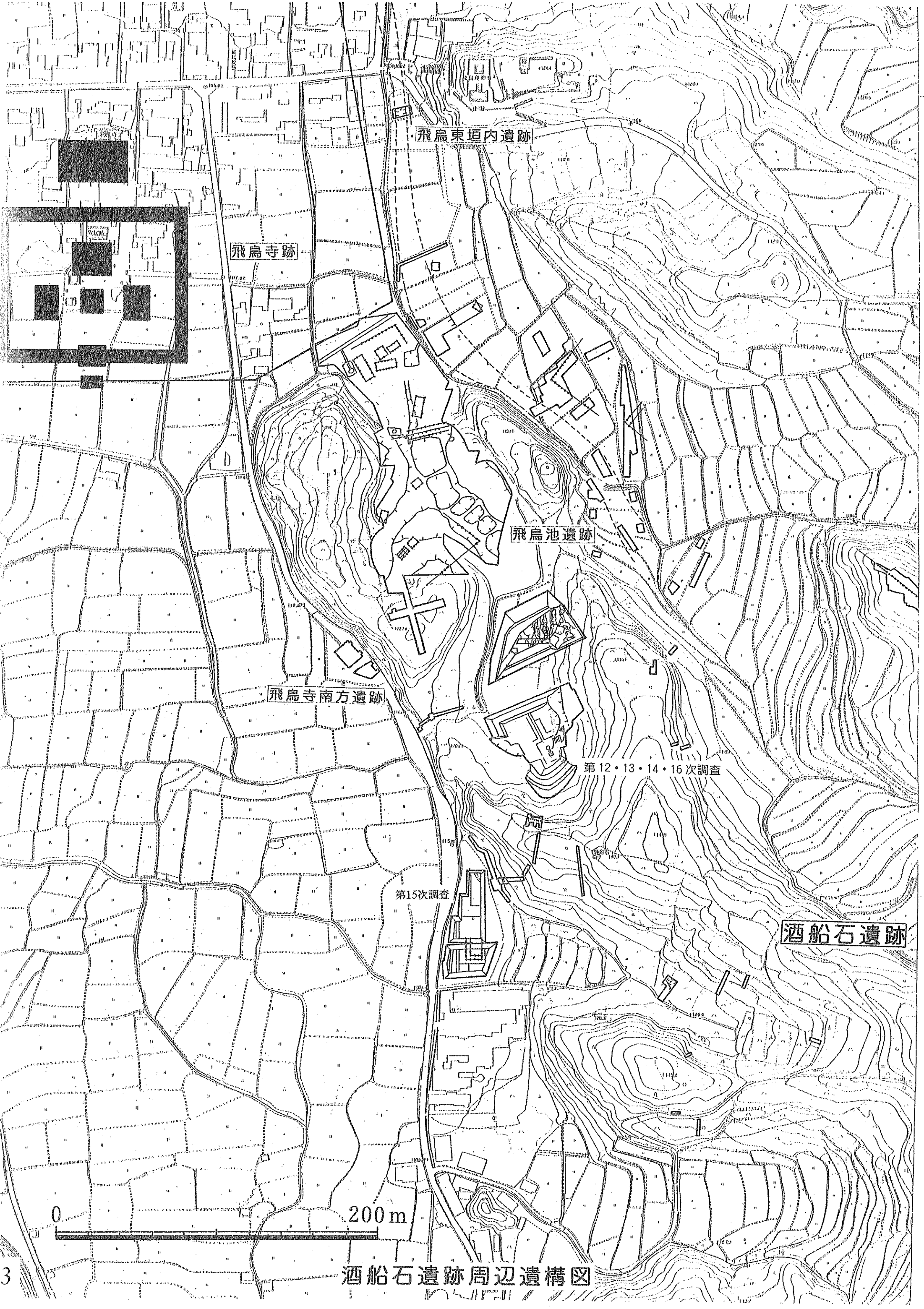
調査地の丘陵西側で検出された遺構群の性格を考えるならば、酒船石遺跡よりも飛鳥京跡の関連性が強いと思われる。



酒船石遺跡（第 15 次）遺構図（1 ：200）



酒船石遺跡周辺遺構図（1 ：500）


飛鳥東垣内遺跡
飛鳥寺跡
飛鳥池遺跡
飛鳥寺南方遺跡
第12・13・14・16次調査
第15次調査
酒船石遺跡
0
200m

酒船石遺跡周辺遺構図

酒船石遺跡　第14次（2000-３次）の調査

１．はじめに

酒船石遺跡は、飛鳥東方の酒船石の座している丘陵にある。平成４年に酒船石の北西斜面での発掘調査で、大規模な版築盛土と天理近郊で採取される凝灰岩質細流砂岩を積み上げた石垣が発掘された。その調査では出土遺物が少なく、時期を特定できなかったが、その位置や構造、天理砂岩の使用等から『日本書紀』斉明二年の「宮の東の石垣」あるいは「両槻宮」との関係が強いと考えられた。明日香村教育委員会ではこの遺跡の重要性に鑑み、平成５年度から範囲確認調査や開発に伴う調査を実施してきたが、平成11年度に丘陵の北側裾で実施した第12次調査では亀形石造物の導水施設を中心として、石敷・石垣等が検出された。さらにその南隣接地で実施した第13次調査では水源地である湧水施設を確認、一連の導水構造を解明した。今回の調査地は第12次調査地の北側の解明に向けて、新たに1200㎡の調査区を設定して行った。これで第12～14次調査地の総面積は約2000㎡となった。

２．検出遺構

今回の調査では上部を後世の削平で壊されているが、尾根斜面裾部・谷底部で石段・南北溝・暗渠・石敷・土坑・柱穴などの遺構を検出した。最も深い南北溝は現地表から6.5m下に位置する。これらの遺構は一時期のものではなく、大小多くの改修の痕跡がみられる。結果、層位・重複関係・出土遺物から大きく５時期に大別される。ここでは第12・13次調査で検出した遺構群もあわせて、各時期ごとに解説する。

Ⅰ期（７世紀中頃）

一連の調査の中では最も古い遺構群である。この時期に属するのは石段①・砂岩列①②・暗渠①②・小石敷・湧水施設がある。石段①は３段（高さ75㎝）まで確認できる。各段の南半には小石を敷き詰めた石敷があり、石敷のない北半には一辺90㎝と40㎝の掘立柱柱穴が計７基みつかった。このうち柱根の遺存するものは皮付の黒木である。暗渠①は現状では砂岩切石の暗渠状であるが、この段階では開渠の石組溝であった可能性が高い。この溝は調査区南から北へと真っ直ぐに延びており、途中東へと屈曲する。同様に12次調査区下層で確認した砂岩暗渠も南から北へとのび、途中で東へと屈曲する。これらの遺構は部分的な確認のために、この時期の南北溝や東側の石段は未確認である。砂岩列①②も階段状石垣の下層に潜り込むことから、この時期に属する。また、一連の導水施設のうち砂岩湧水施設は下から６段目（取水塔は７段目）で積み方が異なっており、これより上は後に積み上げたものと考えられる。よってこの段階では下から６段目までの高さの涌水施設であったと推定できる。これに伴って、亀形石造物・小判形石造物も現在位置に復原するのは難しく、同様の組方であったとしても、もっと低いレベル位置にあったものと推定している。

Ⅱ期（７世紀後半）

Ⅰ期の遺構群を埋め、新たに石段②③④・階段状石垣・石垣・南北溝・石敷テラス・亀形石造物・小判形石造物・湧水施設を設置した時期である。中央の南北溝①は幅1.6m、深さ50㎝で改修のためか、南端では70㎝の幅しかない。この南北溝を挟んで東西に石段を設ける。石段②（15mまで検出）はⅠ期の石段①のうち暗渠①より東側を埋め、同構造の石段を３段（高さ100㎝）設ける。各段には人頭大の石敷を施し、Ⅰ期の暗渠①はこの時期に至って砂岩破片を詰め込んで蓋として、暗渠に変更している。南北溝①の東にある石段③は、階段状石垣から屈曲しながら北へ（16mまで検出）延びる石段である。各段には人頭大の石敷を施し、残りの良い所で10段（高さ2.6m）まで段が遺存する。この石段の南側には幅６mの階段状石垣が８段（高さ２m）あり、さらに石敷テラスを設け、北へと方向を変えて石段④が６段分のステップとしてある。また、西側尾根の斜面裾に施される砂岩と花崗岩の石垣（現高１m）も、この時期には設置されたものと推定している。湧水施設はⅠ期よりも高く11段（高さ1.3m）まで砂岩を積み上げる。同様に亀形・小判形石造物も現在位置に据え直されたと考えている。

Ⅲ期（７世紀後半～末）

この時期に属するのは石段②③④・南北溝①・石垣・階段状石垣・石敷①②③・石敷テラス・亀形石造物・小判形石造物・湧水施設である。石造物の周辺約12m四方には人頭大の石を敷き詰め、石敷広場とする。同時に湧水施設の西側にも幅２mの石敷②を施し、石敷①との間には幅30㎝の溝を設ける。また、西側の石垣の裾に幅1.5mの犬走状の石敷③を敷く。その他の遺構はⅡ期のものがそのまま存続する。

Ⅳ期（９世紀）

この時期には石段②③④・南北溝②・石垣・階段状石垣・石敷①②③・石敷テラス・亀形石造物・小判形石造物・湧水施設がある。石段③のうち下から３段目まで、石段②のうち下から２段目まで、さらに南北溝①を埋めて、新たに南北溝②を掘削する。この溝の南端は３mは粗雑に積んだ石組溝であるが、北部は素掘溝（幅1.5～2.5m、深さ50㎝）である。ただし、溝の東肩には一部石列を並べている。この他の遺構については、Ⅲ期のものが引き続きこの時期にも存続する。

Ⅴ期（９世紀後半）

一連の調査で最も新しい遺構群で、石段②③④・南北溝③・石垣・階段状石垣・石敷①②③・石敷テラス・バラス敷・亀形石造物・小判形石造物・曲物がある。ある。基本的にⅣ期の遺構がこの時期にも存続するが、南北溝②が南北溝③（幅２m、深さ40㎝）に掘り直される。また、湧水施設は完全に埋没しており、かわって湧水施設と小判形石造物との間に直径50㎝の木製の曲物を設置、井戸枠とする。さらに亀形・小判形石造物と石敷の間に小石のバラスを詰める。これによって二つの石造物の下部は埋没する。

なお、調査区の北西部では円形土坑（径４m）がある。この中には６個の花崗岩が埋まっているが、いずれも面を削りだした巨石で、本来丘陵上の石垣の基礎石に使用していたものと考えられる。石垣倒壊後に投棄した土坑と推定される。この所属時期についてはⅡかⅢ期を想定している。また、調査区西部に砂岩を二枚ずつ底石として並べ、側石を立てた砂岩溝がある。砂岩使用の溝であることから、Ⅰ期かⅡ期に属すると想定する。このほかには調査区東部に近代の井戸と耕作に伴う素掘溝群がある。

３．出土遺物と時期

今回の調査で出土した遺物はコンテナで10箱分ある。土師器・須恵器・瓦・木製品・木簡・金属製品・土製品・黒色土器・瓦器がある。特に、土製品には土馬・硯が含まれ、瓦には川原寺式軒丸瓦・重弧文軒平瓦等がある。木簡は南北溝①から３点出土しているが、文字の判明するものには「□□　□鳳二尺四寸」「□□□碁　神□」と記したものがある。

各遺構の所属時期を推定する遺物には、Ⅱ期遺構造営のためにⅠ期の遺構を埋めた造成土から飛鳥Ⅱの土器が、Ⅱ期の南北石組溝の最下層の堆積土からは飛鳥Ⅳの古い段階の土器が、Ⅲ期遺構に対応する南北溝の上層堆積土からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が、Ⅳ期の南北溝②の埋土からは９世紀の土器が、Ⅴ期の南北溝③や曲物の下や亀形石造物のバラスから９世紀後半の黒色土器や饒益神宝（859年初鋳）が出土している。また、石敷直上やこれらを埋める埋土から10世紀初頭の黒色土器が出土する。

遺物からみた各時期の造営年代はⅠ期が７世紀中頃、Ⅱ期が７世紀後半、Ⅲ期が７世紀後半～末、Ⅳ期が９世紀代、Ⅴ期が９世紀後半、これらの遺構の廃絶が10世紀初頭と推定できる。

４．まとめ

今回の調査で酒船石遺跡の北裾に位置する亀形石造物を中心として、約2000㎡を調査したことになる。その結果、尾根上及び斜面上方では削平が激しく、古代に遡る遺構は残っていない。しかし、その斜面裾及び挟まれた谷部では極めて良好に遺構が遺存していることが判明した。特に、今回の調査成果では以下の３点が判明したのでまとめておく。。

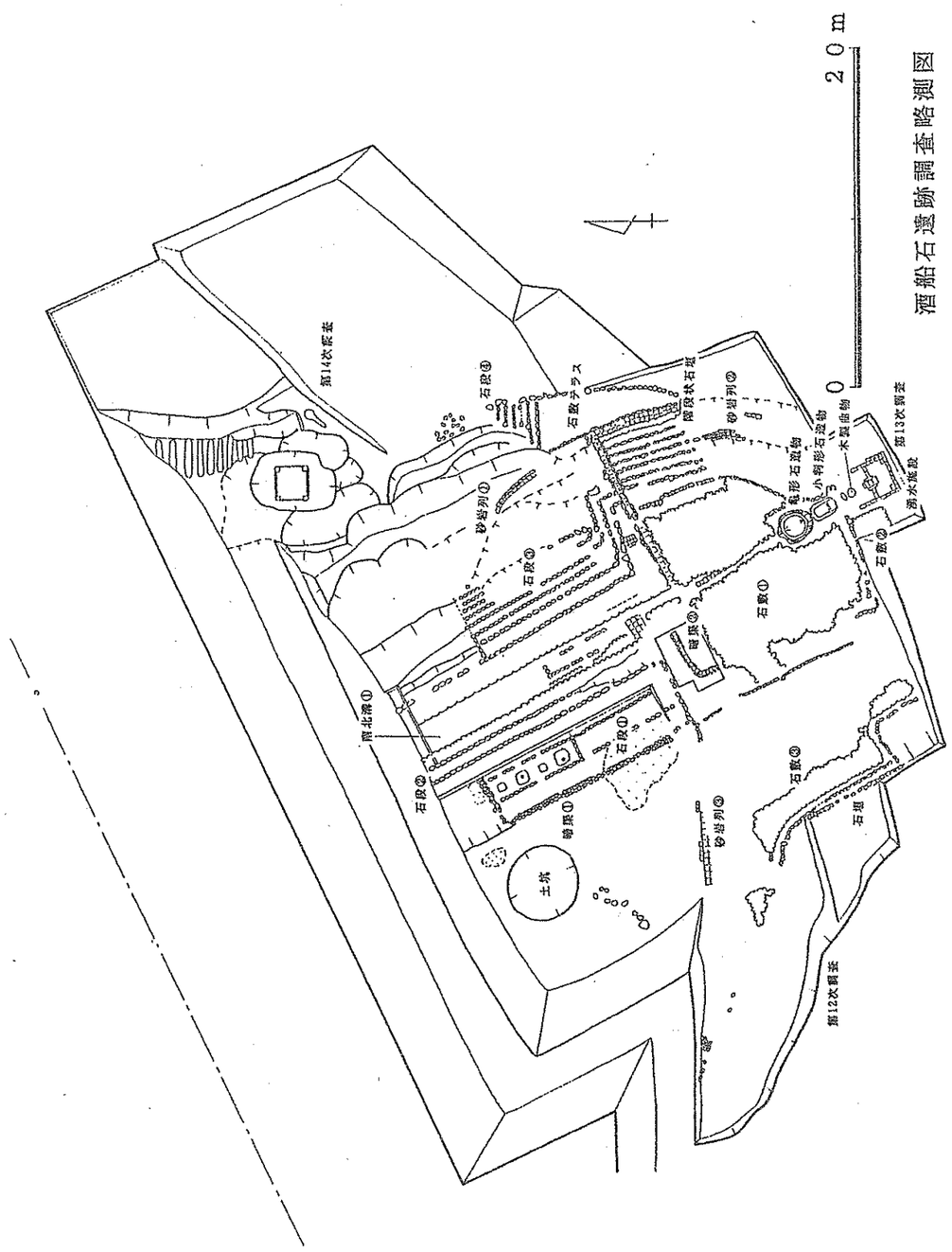
①今回の調査では、南北溝をはじめ石段等の遺構がさらに北へと延びることが判明した。その中心となるのは石造物の導水施設がある石敷の部分である。今回の調査地である北側の南北溝や石段の遺構は尾根の法面処理で、石敷広場に対しては付属の部分となる。しかし、亀形石造物から排水された水や雨水等は、南北溝から北方の飛鳥池遺跡を通って、さらに東側の運河に流していたと推定され、この地域の基幹排水路と考えられる。

②東側の石段や旧地形から当時の様子を復原すると、亀形石造物の場所からの北側の視界は尾根によって遮られており、真上の空しか見えない状況である。さらに尾根の斜面は石垣・石段が積まれており、この場所はこれまで考えていた以上に閉鎖性が高く、人工的な空間であることが判明した。

③この一連の調査では大小様々な改修の痕跡がみられ、廃絶までの250年間を大きく５時期に区分することが可能となった。特に、西側の石段よりも古いⅠ期の石段を確認したことによって、Ⅱ期には大規模な改修があることも判明し、出土土器からⅠ期は斉明朝、Ⅱ期は斉明～天武朝の造営であると推測される。これまで『日本書紀』の斉明二年条との対比によって、斉明朝の造営と推定されていたが、今回の調査では出土遺物によってその時期を検証することができた。

これらの成果を受けてこの地域の性格を検討すると導水施設の構造が観賞用のものとは考えられず、亀の背中に溜まった水に重要な意味があったと推定される。また、その立地が閉鎖された極めて人工的な空間であることや、遺跡が立体的で壮大なことから、天皇に関わる祭祀・儀式を行った場であった可能性が高い。さらに重要なのは、導水施設や石段が当初から存在していたにもかかわらず、Ⅱ期にはこれらを埋めて新たに導水施設を据え直し石段を造営している点である。このことを踏まえると、Ⅱ期に大きな画期はあるもののⅠ～Ⅲ期については一貫して同じ性格を有していたと考えられる。これに対してⅣ・Ⅴ期は石段が途中まで埋まり、湧水施設も小さな曲げ物に代わっている。おそらく柄杓で水を汲み上げていた程度で当初の性格は喪失したものと考えられる。

以上のことからこの空間は、斉明朝～持統朝にかけて、継続的に何らかの天皇祭祀を行った場所であったと考えられよう。



特別史跡　キトラ古墳

所在地　奈良県高市郡明日香村大字阿部山小字ウエヤマ136－1

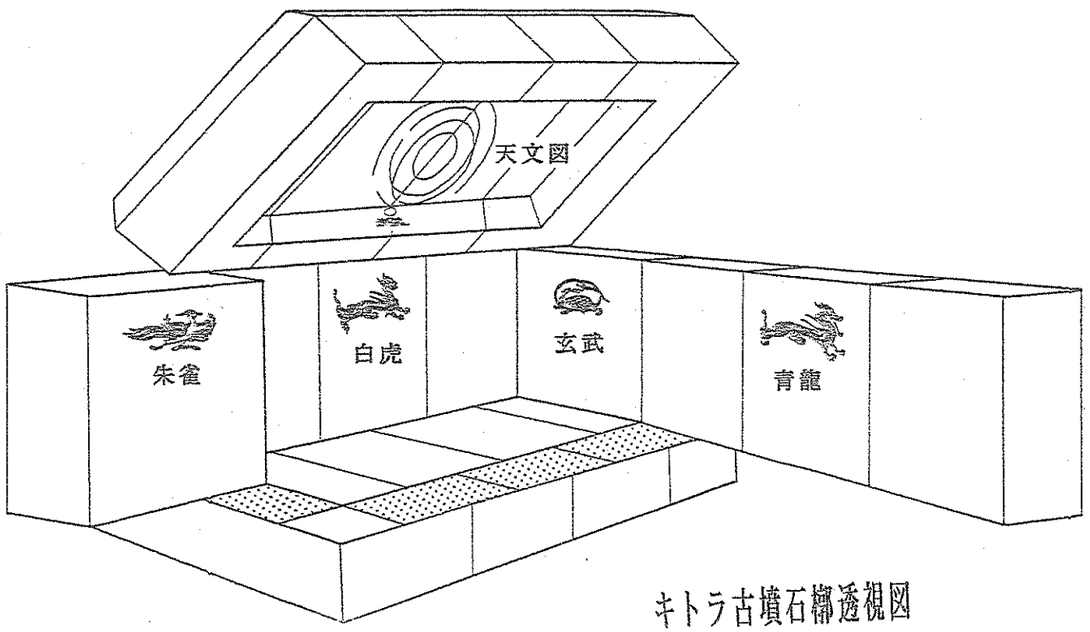
立　地　竜門山塊中の高取山(標高538.9m) から北に伸びる尾根より西北方向に派生する一丘陵の南斜面

墳　丘　墳丘は袋状地形の丘陵稜線からやや下った南斜面で、背後に幅約20m、高さ約3mの切断面がある。墳丘規模は直径約14m、高さ約3mの二段築成の円墳である。

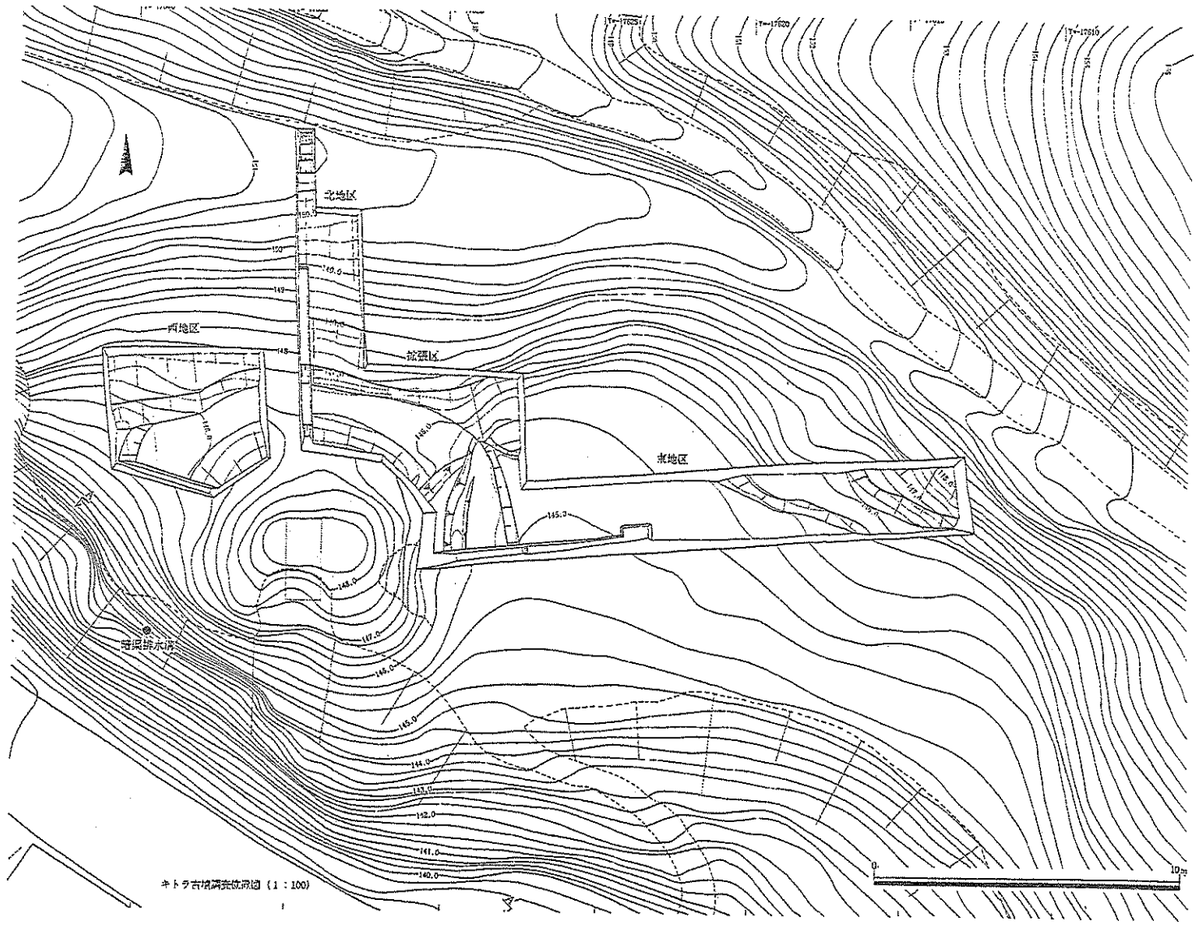
墓　室　墓室は墳丘のほぼ中央に位置し、凝灰岩の切石を組み上げた横口式石槨である。石槨は、両側壁各3石、扉石1石(床石は堆積のため不明)から構成されており、床石の上に両側壁・奥壁・扉石を置き、天井石を架構した形となっている。また、天井石の内面は高さ約15cm程刳り込んでおり、家型を呈している。このような構造はマルコ山古墳(明日香村)や石のカラト古墳(奈良市)にもみられる。

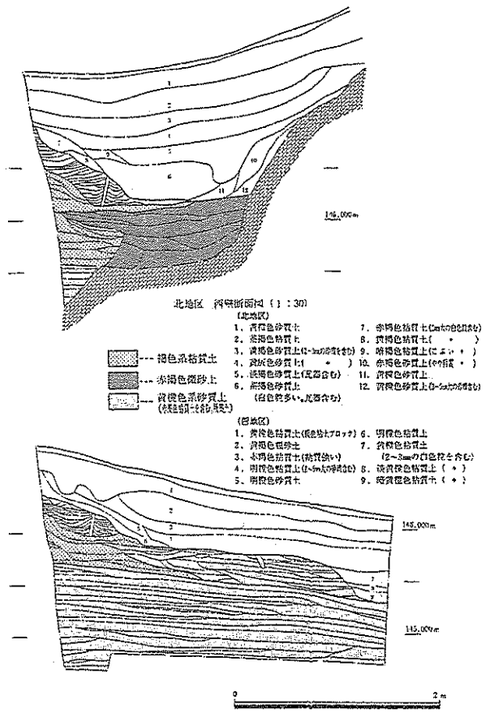
石槨の規模(内法)については長さは不明であるが、奥壁は幅約1m、高さ約1.2mを測る。

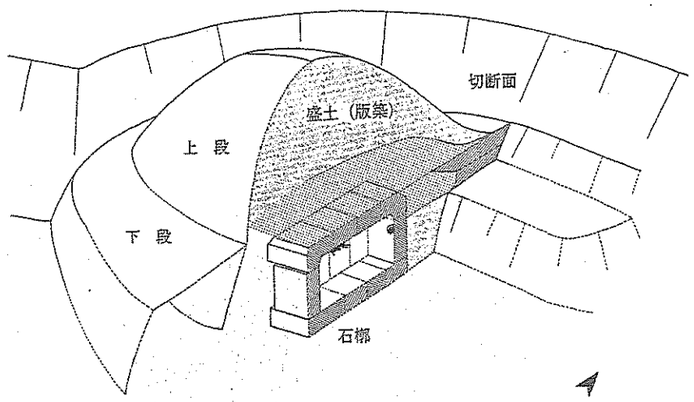
壁　画　石槨内の壁面には漆喰が塗られており、壁画が描かれている。北壁に玄武、東壁に青龍、西壁に白虎、南壁に朱雀の四神像が描かれている。天井には三重の同心円(内規・赤道・外規)と黄道の中に金箔を円形に切って朱線で結ばれた星座が表現されている。また、天井の家型部分には東に日像、西に月像が配されている。玄武の大きさは測定の結果、幅21cm、高さ12cm程と判明している。



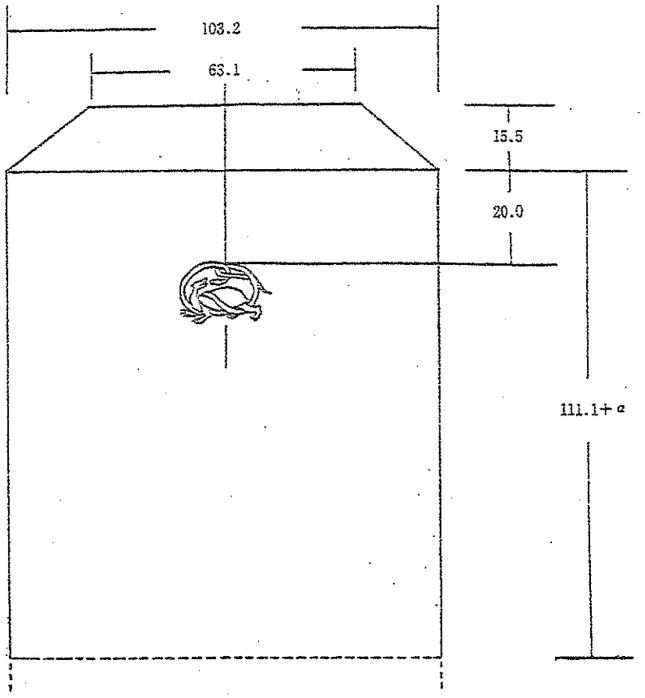
キトラ古墳石槨透視図

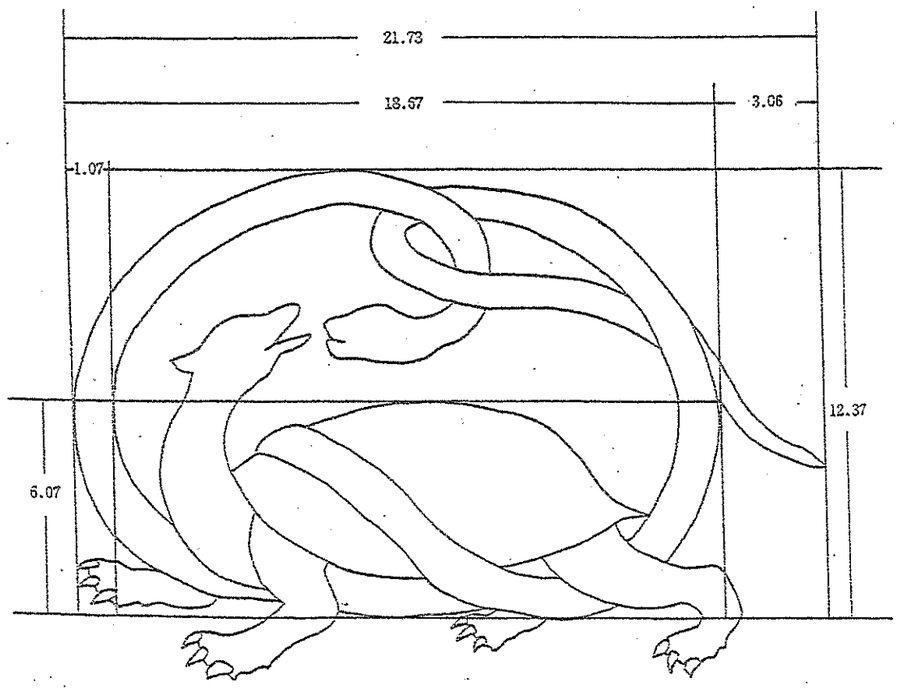






キトラ古墳墳丘構造概念図

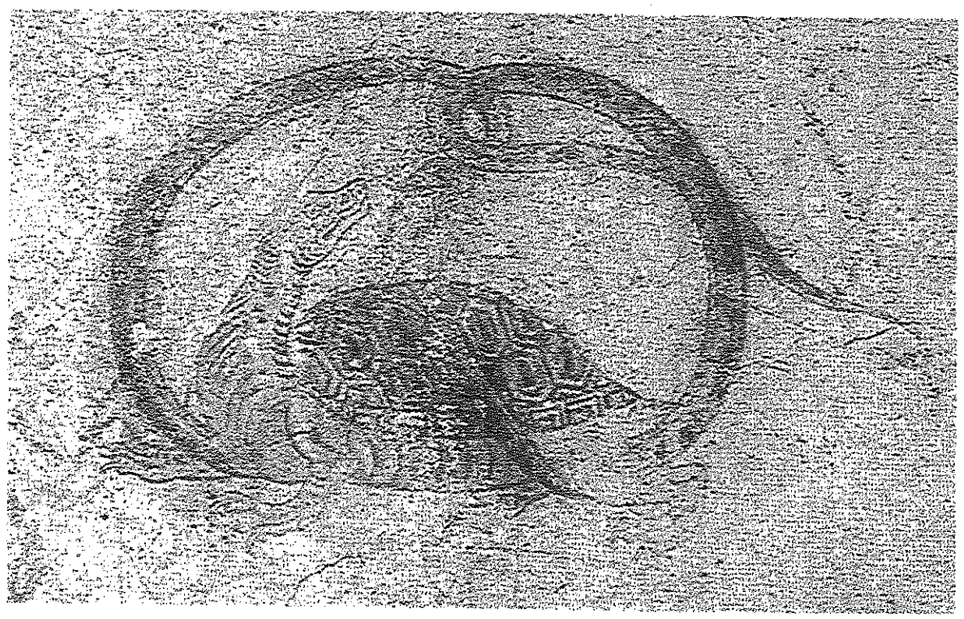




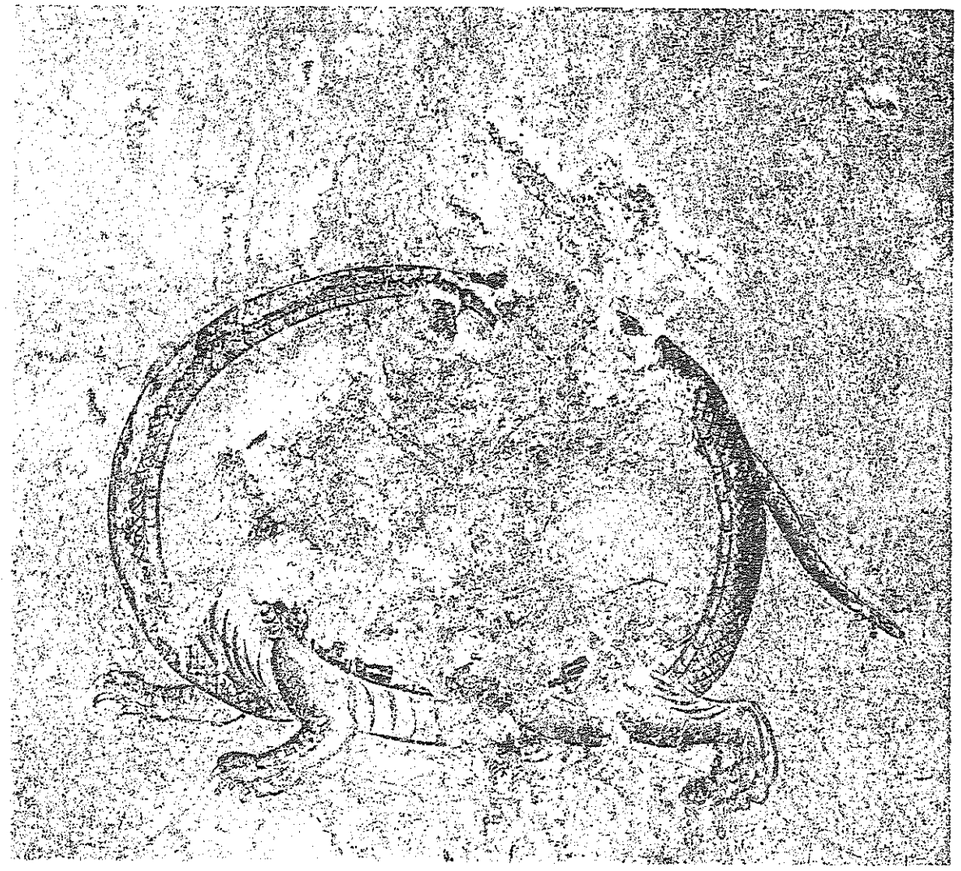
キトラ古墳石槨・玄武寸法（cm）

		高松塚古墳	マルコ山古墳	石のカラト古墳	キトラ古墳
所在地		明日香村大字平田 字高松444	明日香村大字真弓 字ミヅツ146	奈良市山陵町別当谷 1964	明日香村大字阿部山 字ウエヤマ136－1
調査期間		昭和47年 (1972)	昭和52、53年 (1977、1978)	昭和54年 (1979)	昭和58年、平成9、10年 (1983、1997、1998)
古墳立地		北西に伸びる丘陵の西南斜面 墳頂部の標高約113m	北西に伸びる丘陵の南斜面 墳頂部の標高約125m	南北に伸びる丘陵の東側の緩斜面 墳頂部の標高約113m	東西に伸びる尾根の南斜面、中腹部 墳頂部の標高約148m
墳丘規模		円　　墳 上部16m、墳丘基盤（下部）直径20m 下からの見かけの高さ約9.5m 斜面上方の高さ約3.5m	2段築成の円墳 直径15m、墳丘北側の2重石敷を含めた直径は約24m 見かけの高さ約5.3m	上円下方墳 直径13.8m、高さ2.91m 上円部の直径9.2m、高さ1.55m 下方部の一辺13.8m、高さ1.36m	2段築成の円墳 上段直径9.4m、下段直径13.8m 北側(上段)の高さ約2.4m 西側(上段＋下段)の高さ約3.3m
		墳丘の調査が余り行われていないので全容はわからない。	墳丘の北側には2重の石敷が巡る。外側の石敷は北端を見切石風に並べる。外側の石敷の下に幅22～34cm、深さ15cmの暗渠があり、中に礫を詰める。石室前面墓道下に礫を詰めた暗渠がある。	墳丘の下や周辺に中に礫を詰めた幅40cm、深さ20～30cmの暗渠排水溝を巡らす。	墳丘南西斜面下に礫を詰めた暗渠排水溝(幅40cm、深さ70cm）がある。
墳丘盛土		版　　築 数cm単位で突き固める 幅5～6cmの溝状の空間があり、板状痕跡の可能性がある。	版　　築 数cm単位で突き固める 墳丘1段目及び外周の溝に礫を敷き詰める。	版　　築 数cm単位で突き固める 墳丘全面に川原石で葺石を施す。	版　　築 数cm単位で突き固める 北・西側の墳丘裾で厚さ4～5cmの板状痕跡と、板を固定する直径約10cmの杭跡を検出。
石材		凝灰岩切石	凝灰岩切石	凝灰岩切石	凝灰岩切石
石材個数		床石3、羨石1 奥壁1、天井石4 側石各3　　(計15石)	床石4、羨石1 奥壁2、天井石4 側石各3　　(計17石)	床石4、羨石1 奥壁1、天井石4 側石各3　　(計16石)	床石？、羨石1 奥壁1(又2)、天井石4 側石各3　(計12＋α石)
石槨規模(内法)	長	265.5cm	271.9cm	260.0cm	不　明
	幅	103.5cm	129.7cm	103.0cm	103.2cm
	高	113.4cm	135.3cm	106.5cm	111.1＋αcm
	備考		石槨内は家形 143.3cm(家形の高さ8cm)	石槨内は家形 116.5cm(家形の高さ10cm)	石槨内は家形 126.6+α(家形の高さ15.5cm)
漆喰		石槨内全面に塗る (厚さ2～7mm)	石槨内全面に塗る (厚さ2～7mm)	な　し	石槨内全面に塗る？ (厚さ不明)
壁画		奥壁　玄　武 西壁　白虎、月像 男、女群像 東壁　青龍、日像 男、女群像 天井　星宿図	壁画なし (竹管状の圧痕あり)	壁画なし	奥壁　玄武 西壁　白虎 東壁　青龍 天井　天文図 日像（東斜面） 月像（西斜面）
主な出土遺物		漆塗木棺 棺飾金具、銅釘 金銅、銅製座金具 海獣葡萄鏡 大刀金具 琥珀製丸玉 ガラス製丸玉 ガラス製粟玉ほか	漆塗木棺 棺飾金具、銅釘 金銅、銅製座金具 俵鋲、山形金物 金銅製大刀金具 尾錠ほか	金箔片、黒漆片 金製の玉 銀製の玉 銀製大刀金具ほか	不　明（未調査）

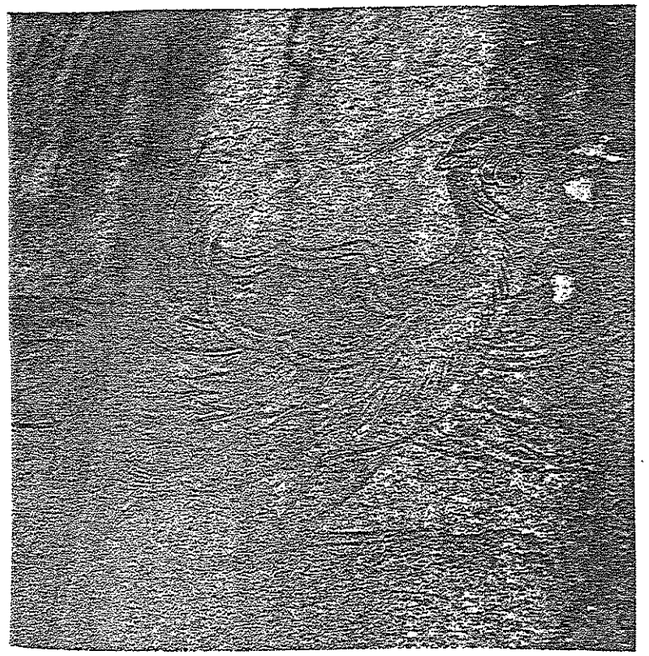
高松塚・マルコ山・石のカラト・キトラ古墳の比較表



キトラ古墳•玄武



高松塚古墳•玄武



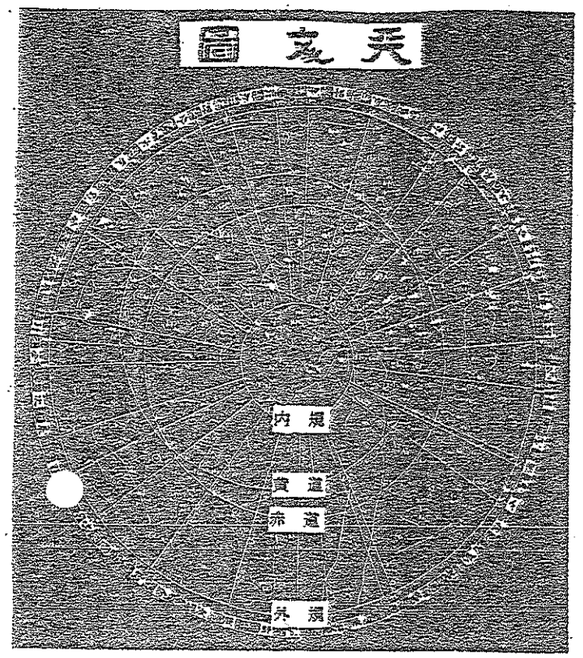
キトラ古墳・朱雀

江西中墓(高句麗)・朱雀

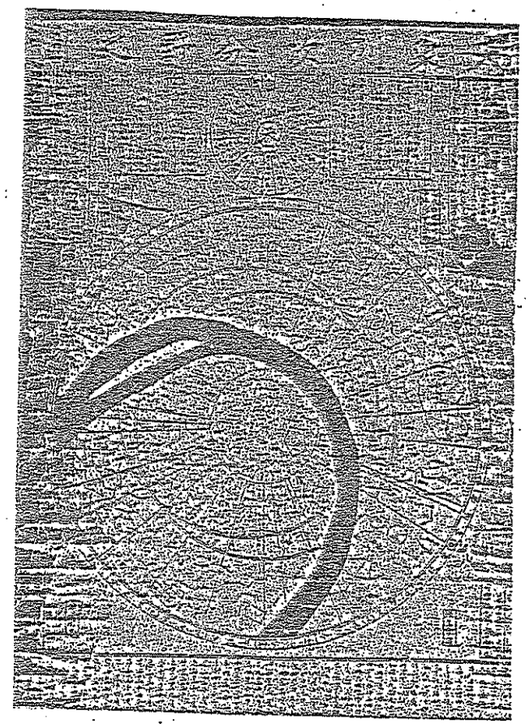
三室塚古墳(中国・東北地方)・朱雀

中宮寺、天寿国繍帳・鳳凰

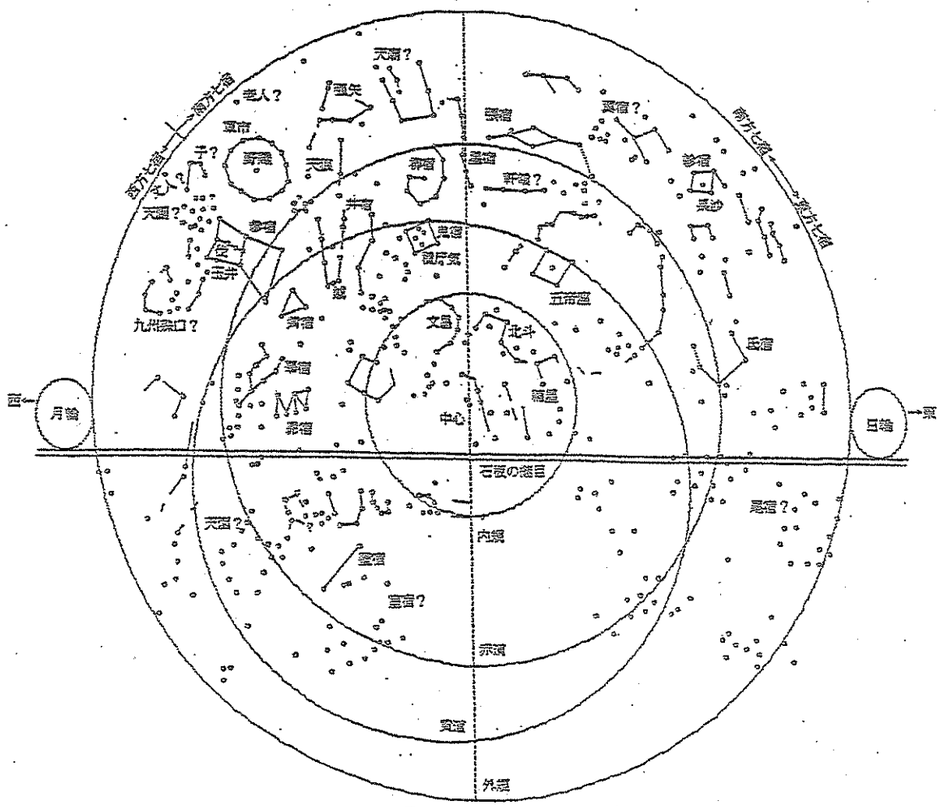
薬師寺金堂•薬師如来座像台座 朱雀

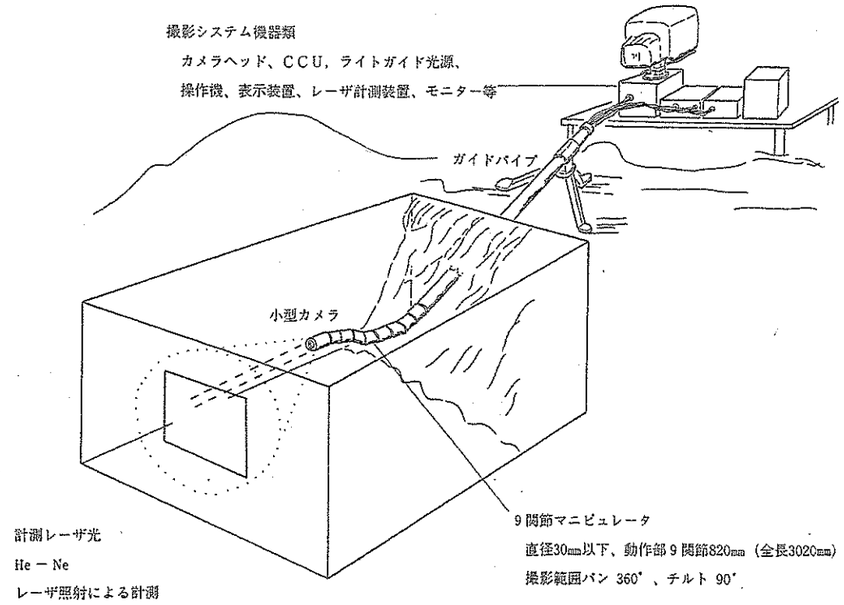


淳祐天文図

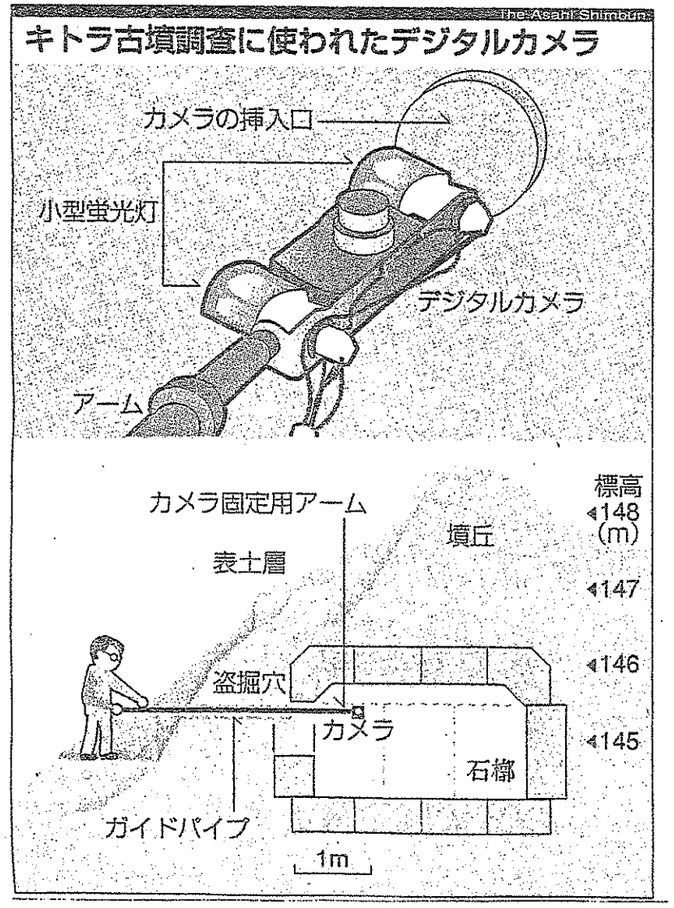


天象列次分野之図





第36図　内部探査概念図



記念講演

「キトラ古墳の朱雀と玄武図をめぐって」

明日香村文化財顧問・関西大学名誉教授
網干　善教　氏

キトラ古墳の朱雀と玄武図をめぐって

網干善教

昭和四七年三月、奈良県高市郡明日香村平田に所在する高松塚古墳を発掘調査したところ、石槨内に極彩色で星宿、日・月、四神及び男女人物像の壁画が描かれていた。その壁画の四神像のうち、南壁面に描かれている筈の朱雀図が、盗掘によって壁面漆喰が剥落し、消滅していた。

北壁に描かれた玄武図も、盗掘者が持ち込んだ小さな手鍬のようなもので壁面の漆喰を叩いた（玄武図の中央部に刃物の痕跡が明確に残っている）結果、亀と蛇が相対して睨む位置から亀の甲羅の部分にかけて剥落していた。ただ、幸いなことに顔の部分を除いて、復元図が描ける程度は残存していた。

高松塚古墳の発掘調査から約一一年が経過して同村阿部山にあるキトラ古墳を探査することになった。その間の事情は省略するとして、探査は昭和五八年一一月七日にファイバースコープの挿入を実施したところ石槨内の北壁面に玄武図が描かれていることが分かり、高松塚古墳以外にも壁画古墳の存在が判明した。ただ、この時の映像が不良で図像が詳細でなかった。平成一〇年三月五・六日に実施された第二回の探査も星辰、日月、四神図の遺存を確認したが、これも図像が鮮明でなく十分な資料とはならなかった。

再々度の平成一三年三月二二日実施された探査は、デジタルカメラの挿入による撮影が行われ、新しく南壁の朱雀図の存在が判明したほか、北壁面の玄武図の鮮明な映像資料を得ることができた。これによって高松塚古墳の玄武図の闕如を補うことができた。

ところが従来の玄武図に対する観察や考察は四神像の一幅として取扱われてきた結果、他の玄武像との対比が行われておらず、高松塚古墳の場合もそうであったように、十分な比較検討を経ないで単に高句麗古墳壁画との共通性を強調し、延いては絵師の問題にまで発展させてきた感がある。確かに高松塚古墳での玄武図確認の時点では、日本に於ける壁画古墳の玄武図は皆無であったことと、前述の如く、壁面の損傷がひどかったことから他の資料との比較を行う自信がなかった。今回のキトラ古墳壁画の玄武図が殆ど完備な図像としての映像を得たことにより、比較研究が可能になった。そこで、キトラ古墳と高松塚古墳や他の玄武図との比較を行い、どこが共通し、どこが相違するのか。そして、その相違によって齎される問題を指摘し、所見を試みようとするのである。

方法としてはじめに玄武図を通観し、管見ではあるが玄武の構図を次のように分類することができるのではないかと思う。

第一類型　亀と蛇の顔が亀の前で睨み合い、そして蛇が亀の甲羅に絡むもの

A式＝甲羅に一重に絡むもの

B式＝甲羅に二重以上絡むもの

第二類型　亀と蛇の顔が、亀の甲羅の上で睨み合い、蛇が亀の甲羅に絡むもの

A式＝甲羅に絡む場合一重で、蛇身が「8」の字形に絡み複雑であるもの

B式＝甲羅に絡む場合一重で、蛇身に複数回の絡みがあるもの

C式＝甲羅に絡む場合二重以上であるもの

第三類型　極めて特殊な表現であるもの

以上の分類は一口に玄武像といっても、表現上種々の相違があることの説明上の試案であって、今のところこの分類に編年的傾向があるとしても、即明確な編年の指標ではないということを附言しておきたい。

明日香キトラ古墳壁画の玄武図について

網 干 善 教

（1）

奈良県明日香村阿部山に所在するキトラ古墳の石槨内に星宿、日月、四神図が描かれていることは以前の調査によって判明していた。ところが2001年（平成13）３月22日にデジタルカメラを挿入し撮影したところ新しく南壁に朱雀図が描かれていることが分かると同時に北壁の玄武図の比較的鮮明な映像が得られた。

実は1983年（昭和58）11月７日、第１回目のファイバースコープの挿入により玄武図の遺存を確認していたが、映像が鮮明でなく詳細な観察はできなかった。今回はそれをある程度補うことができたと同時に玄武図の形態、表現などの手掛かりを把握することができた。それをもとに若干の私見を述べてみたい。

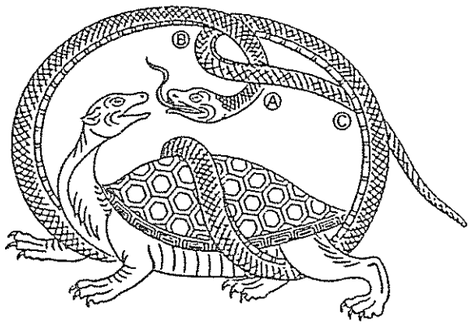
（2）

鑑鏡や瓦当、壁画などに四神図が表現されている事例は中国をはじめ高句麗、百済、さらにはわが国の文物にみられる。これは中国における四神思想を基調としていることはいうまでもない。したがって、28宿の北方７宿から具象化された玄武図があると、それは中国に由来するものであるとされるのである。ところが古墳壁画の場合、四神図を描かれたものが中国吉林省集安や北朝鮮平壌周辺の高句麗古墳壁画に著名なものが多いから、短絡的に玄武図があればすぐ高句麗古墳壁画との比較しその影響、あるいは高松塚古墳やキトラ古墳の場合などでは絵師の問題にふれて、高句麗からの渡来若しくは渡来系の画工によって描かれたとする意見まで述べられたことがあった。果してそうであろうか。それは玄武図すなわち高句麗壁画という先入感があるのではなかろうか。確かに先述の如く四神思想は中国に由来する思想であり、表現であることは間違いないが、表現の方法、描写の技術など必ずしも同じものではないと考える。

例えば、高句麗古墳では集安にある五盔墳の第４号、第５墳、四神塚などの玄武と、有名な江西大墓の玄武図と、高松塚古墳、キトラ古墳、あるいは奈良薬師寺本尊如来像台座や正倉院御物八卦背十二支円鏡の玄武図などを比較すると相違する表現のあることが分かる。この表現の相違を無視して全く同一のものと考えたり、高句麗古墳にあるから、絵師は高句麗からの渡来人、あるいはその子孫であろうとか、具体的な人物として黄文連本実を挙げることなど、軽々に論ずるべきではないと思う。以下その理由を挙げておく。

（3）

キトラ古墳で確認した玄武図をもとに製作された玄武の模式図がある。この壁画のなかで、亀に蛇が絡む表現を観察してみよう。



模式図

西を向く亀が描かれる。この亀の顔は蛇と対峙している。蛇の顔から尻尾にいたる体の絡み方をみると１箇所の絡みと１箇所の交叉するところがある。この頸から尻尾までの説明に便宜上、Ⓐ、Ⓑ、Ⓒの記号を符しておく。

蛇が顔から頸にいたるところの最初の交叉する位置Ⓐをみるとこの部分では蛇体の下を潜る。次にⒷの交点をみると、頸から上ってきた体は上側を通り交叉する。これで確かに絡まることを表現している。

次に蛇体は亀の前脚の間を通り、甲羅を一重に巻いて、後脚を通り、上に跳ね上がる。尻尾との交叉するⒸでは尻尾の方が下になる。これがキトラ古墳の玄武図であり、高松塚古墳の玄武図と同一の描き方である。

次に高松塚古墳以来、よく比較される資料に高句麗江西大墓の玄武図がある。江西大墓の玄武図ではⒶは頸のところが上になり、Ⓑの交点では下になり、Ⓒでは尻尾の方が上を通る。結論からいえば、江西三墓と高松塚古墳やキトラ古墳の玄武図とは全く逆の絡み方になる。すなわち江西大墓の玄武図を粉本としては高松塚古墳やキトラ古墳の玄武図は描けないということにもなると考える。

次に奈良薬師寺本尊台座の玄武をみてみよう。Ⓐの交差点では頸が上を通り、Ⓑでは下を通り絡む。Ⓒは上を通り、尻尾の方は下を通る。すなわち高松塚古墳やキトラ古墳と比較するとⒶ、Ⓑでの交叉状況は逆で江西大墓と同様であるが、Ⓒの状況は高松塚古墳やキトラ古墳と同じであり、江西大墓とは上下逆になる。

正倉院十二支八卦背円鏡を観察するとⒶ、Ⓑ、Ⓒとも高松塚古墳やキトラ古墳と同じ形状である。同時に江西大墓と逆であり、薬師寺本尊台座とはⒸの部分が異なる。

一体これらの相違は何を意味しているのであろうか。その理由の適格な見解はいまのところない。ただ、玄武図といっても細部において画法や表現が異なる。こういう点を無視して玄武図があれば、高句麗、あるいは粉本は高句麗壁画であると主張してよいだろうか。より慎重な対応が肝要であり、改めてこの類の資料を集積して改めて私見を述べることとする。

（4）

キトラ古墳玄武図に関連してもう一つの　問題を検討しておきたい。キトラ古墳の探査によって南壁に、西向きの朱雀図が描かれていた。前回の２次にわたるファイバースコープによる探査の結果、東壁の青龍の一部、西壁の白虎、北壁の玄武図が分かった。ところが、西壁の原則に反して白虎が北向きに描かれていた。これをめぐっての意見が述べられた。そのうちの一つに見解に、四神図が時計廻に描かれているというのがあった。ところが、玄武図は明らかに西を向いていることからこの意見は一瞬に否定された。

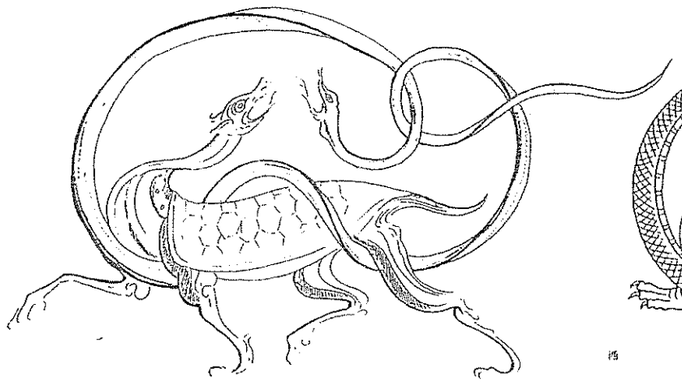
今回、朱雀が西向きに描かれていることをうけて再び百橋明穂氏のようにＴＶや新聞などのメディアを通じて時計廻りとし、これを循環構図とするという観察まで現れた。これには大きな矛盾がある。それは玄武図である。四神図は本来、四方の７宿を具象化した図像であって、亀は西側に頭があり、西向きに描かれるものである。キトラ古墳の玄武を東向きとするのは極めて滑稽な見解である。それは、亀は東を向いているのではなく、蛇と向い睨み合っているのである。そこには東を向くという意識はない。例えば、集安四神塚などのように蛇の顔が玄武の顔と対峙しており東、西という意識は感じられない。

もう一つ重要なことはこれを認めるとすると江西大墓にしろ、高松塚古墳、キトラ古墳をはじめ薬師寺本尊台座像や正倉院御物十二支八卦背円鏡など玄武図の大半はすべて東を向いているということとなる。そうすれば四神図の意味がなくなる。

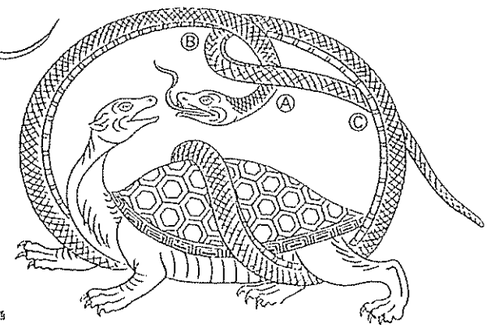
（5）

学問的理解は同様な資料がある場合、できるだけ多くの資料を聚成し、その共通点、相違点と比較して事の真実を究めようとする方法をとる。単なる思いつきで、他の資料を全く無視して自説を主張することはよくない。所見を述べるのはよいが、単なる思いつきでなく、慎重な考察から結論を導き出す手法がなくてはならないと思う。

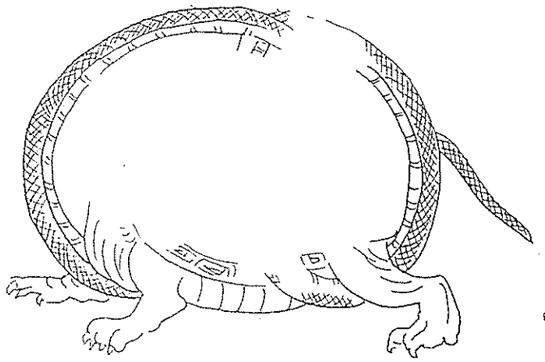
第２類型　Ｂ式



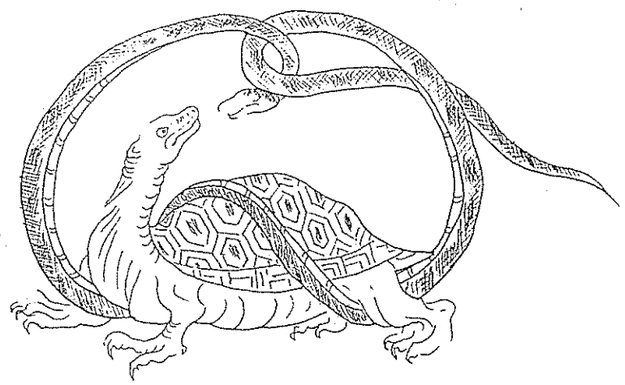
江西大墓



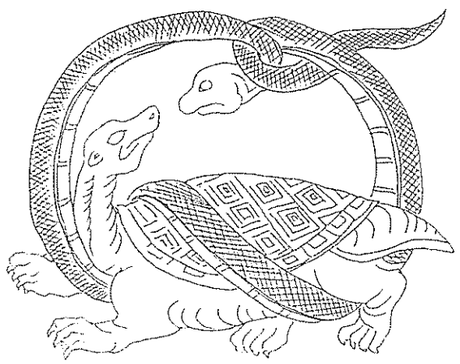
模式図



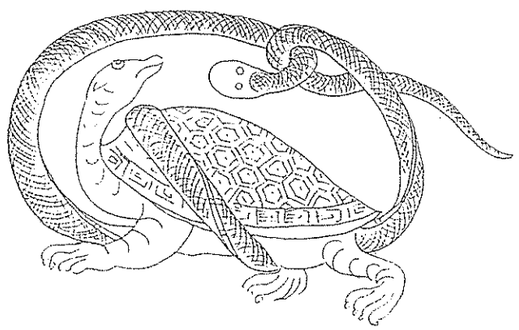
高松塚古墳



キトラ古墳

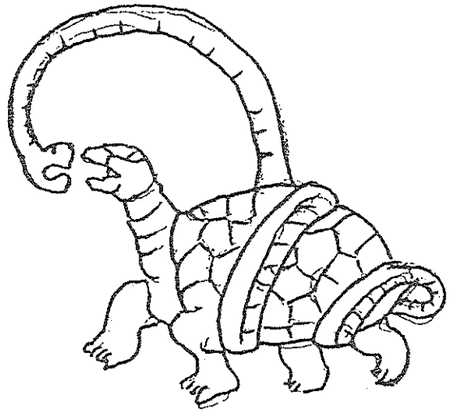


正倉院円鏡



薬師寺本尊台座

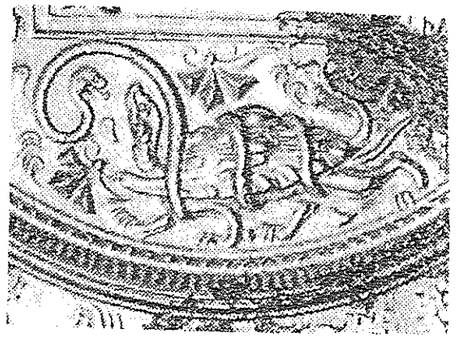
第１類型　Ａ式



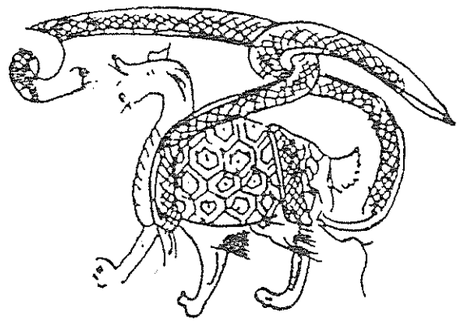
王暉墓（２１２）

漢代瓦当

第１類型　Ｂ式

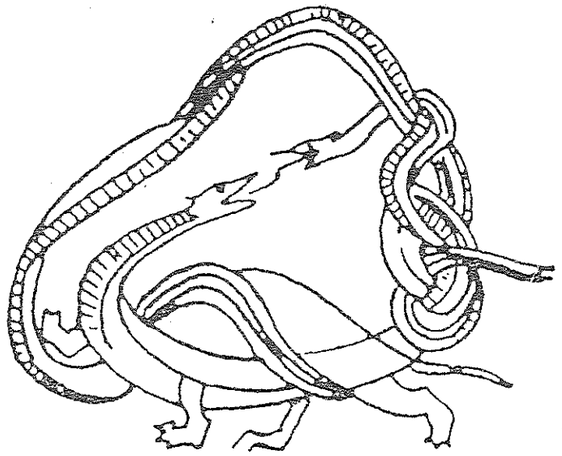


黒川古文化研究所唐永徽元年（６５０）鏡



薬水里

第２類型　Ａ式



集安四神塚

五盛墳四号墓

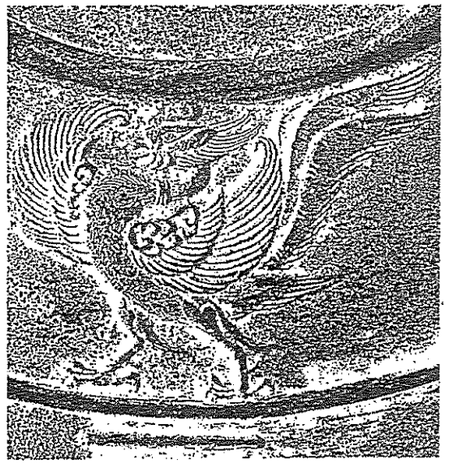
静　止

壺坂寺　塼

歩　行

西安法門寺

江西大墓

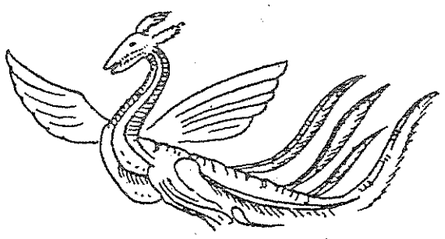


正倉院円鏡

飛　翔

薬師寺本尊台座

頡頏（けっこう）



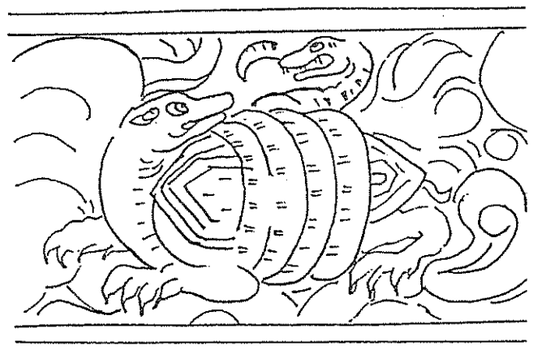
天王地神塚

キトラ古墳

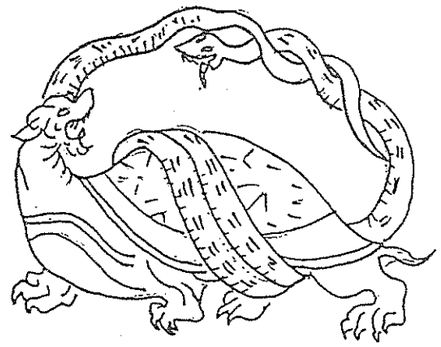
第２類型　Ｃ式

張去奢（じゃ）　（７４７）

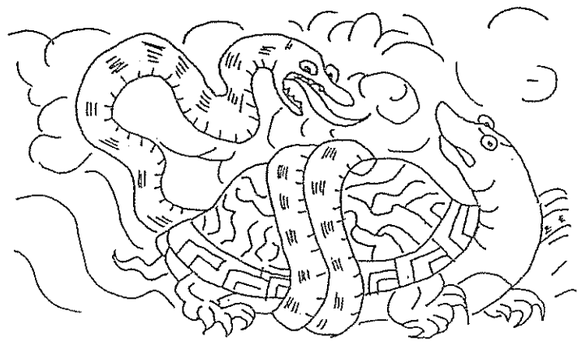
豆盧建（ろけん）　（７４４）



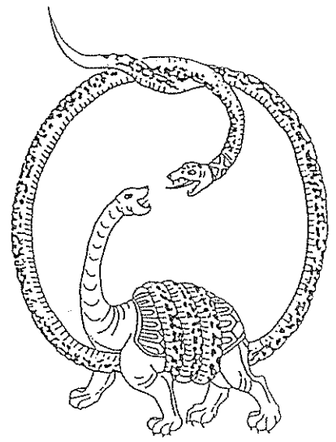
郯国（たん）大長公主　（７８６）



忠思礼　（７４４）



李敬実　（８３３）



高元珪　（７４５）